2005年度授業改善研修参加レポート 所属（国際コミュニケーション学部）氏名　田本健一

「研修会等名称」
リミーディアル教育セミナー

場所：東北福祉大学
期間：2005 年 11 月 5 日、6 日

１．研修の内容

手短に言えば、多様な、学力差のある学生を抱えている大学において、如何にして学力低下問題に取り組むかということであり、リミーディアル教育にＩＴをどのように活用していくかということを検討した、ということになる。

以下のテーマ及び講師によって行われた：

１．入生の基礎学力の低下と対応策：プレースメントテストとリミーディアル教育。講師：ＮＩＭＥ教授　小野博
２．米国の大学における初年次教育。講師：同志社大学教授　山田礼子
３．初年次教育と教員のＦＤ。講師：横浜国立大学教授　林部英雄
４．日本語・学習リテラシー教育。講師：東京農工大学助教授　馬場真知子
５．英語初年次教育。講師：千葉商科大学教授　酒井志延
６．数理系初年次教育。講師：千歳科学技術大学助教授　小松川浩
７．E-learning と著作権。講師：ＮＩＭＥ教授　児玉晴男
８．各大学の情報交換。全参加者

上記８テーマの内、ＮＩＭＥ教授　小野博氏による「入生の基礎学力の低下と対応策：プレースメントテストとリミーディアル教育」と題する報告は、リミーディアル教育の問題を包括的に多様な面から捉えているので、特に興味があるものであった。従って、その報告について、もう少し詳しく内容を述べることにする。アメリカの大学の分類（1. Research University; 2. Teaching College; 3. Community College）から始まって、日本における大学においても、入学試験の多様化に伴い、アメリカの大学に似てきているところから、リミーディアル教育が必要となってきた。ただし、これまでのアメリカの教育制度を色々研究して日本の大学に応用しようとしても必ずしも上手くいかない。それは両国間の社会的相違に起因することが大きいと言う。アメリカの大学におけるリミーディアルの例として挙げたことに、中学校レベルのことでもできるようになるまでやらせるということとして＋と－の概念の習得である。ハワイの Community College の例として挙げられたことに、入学手続き後英語、数学の placement-test の結果、英語４５％、数学５５％が不合格になり、リミーディアル・コースへまわされたということがある。カリフォルニア州立大学クラトン校は、Teaching College としては、州立ではトップクラスであるのだが、リミーディアル・コースが必要であるとのこと。日本人の英語力が落ちている原因として、中学・高校での文法を重視しない Communication 型になったからだという。実用英語検定試験でいうと、現在高校 2 年生の平均は 3 級レベルになってしまったという。文法は、大学に入ってからでも補強可能であるが、語彙の問題至っては時間を要する。つまり、大学に入ってからでは遅すぎるので、小、中、高、大ときづきあげられるべきものなのである、という。日本の大学における入学前教育は、近年増加の傾向にある。これもリミーディアルの一種としてみなしている。以上が、ＮＩＭＥ教授　小野博氏による「入生の基礎学力の低下と対応策：プレースメントテストとリミーディアル教育」と題する報告の内容である。

２．研修の成果

学力低下問題と、その救済策の必要性については、本学で教鞭を取りながら常に感じてきたことである。それをいまさらながらではあるが、アメリカの大学の例、日本における他大学の例を具体的に示されることによって身をもって知らされたような気がする。そういう意味では、大いに成果があったと思う。とりわけ、アメリカの大学の現状をこれだけ具体的に知ることができたことは、大きな収穫であった。小野博氏が指摘したように、日米間の教育制度を比較研究するには、または、アメリカの大学の教育制度を日本のそれに応用していくには、確かに両国間の社会的相違を考慮に入れなければならない。盲目的に外国の大学教育に従うと言うことは極めて危険なことである。

入学前教育をリミーディアルの一種としてみなしていることも参考になった。本学でも、入学前教育の実績はあるが、リミーディアルという感覚で扱ってはこなかった。これをリミーディアルという角度から今後さらに検討していくなら、より多くのアイディアが出てくるように思われる。

大学における英文法教育のリミーディアルを考えるということは、確かに必要なことである。その必要性は、32 年間英文法を教えてきた者として、痛感している。このことは、語彙習得の問題とともに考えていかなければならない。

３．授業への研修成果の反映状況

学力低下対策として通常の授業で行っていることは、様々である。3 年次生、4 年次生の専門課程の授業やゼミにおいてでも、長文を、基本五文型に分析して、説明しては読み砕いてやったりしている。また、語彙習得面では、長目の難解な単語に関しては、語源に溯って、同語源のよく知られている単語との関連で意味を説明したり、要素分析により語幹部を取り出して、その説明からはいるような工夫をしあっている。

入学前教育に関しては、国際コミュニケーション学部、言語コミュニケーション学科の場合、推薦入学の合格者に対して、読書感想文を提出させ、それを本学科の教員が手分けして読んで感想を書き入れて推薦入学合格者にフィード・バックしている。それに付け加えて、英会話の短期レッスンも行っている。ＴＴが交代で、推薦入学合格者に２週間程のレッスンを与えているのである。これは高校側には評判がよい。

リミーディアル的な手当ては、小生の場合、相当前から実行してきた。小生が始めて教壇にたったのは、今から 32 年前のことで、千葉県の柏日体高校という、日体大の付属高校であった。生徒のレベルの差はあまりにも著しく、20 歳台の青年教師としては、大変苦労した記憶がある。そこでは、早々とリミーディアル教育が実践されていた。その後、東京都立竹台高校で教鞭をとることになるが、進学校であっても落ちこぼれがいたので、父兄の要望もあり、補修合宿をした経験がある。これもリミーディアルということになるのか。その後、秋田の聖霊女子短期大学で専任講師として勤務することとなった。ここでも、レベルの差が大きく、教えるのに苦労した。補習をやったこともあった。その頃著したものに、『大学生のための英単語』（サウンディングズ英語英文学会編：八重岳書房）、『基本英文法作文演習』（徳永守儀、田本健一、網代敦著：成美堂）がある。前者は語彙習得を目指したものであり、後者は、中学 2 年生程度の文法から高校 3 年生程度の文法を短大生用にリミーディアル教材的に編集したものである。愛知大学三好校舎に着任してからも、リミーディアルには、気を配ってきた。『基本英語表現法』（田本健一、サイモン・サナダ：成美堂）は、その目的で編纂された教材である。

学 部 長	ＦＤ委員長	ＦＤ委員会	総合企画課長	係